

国指定重要無形民俗文化財

西馬音内盆踊り



母から子へ、またその子へと
受け継がれてきたという
昔を物語る端縫の衣裳をまとい
鳴り響くお囃子の音色を聞きながら
女たちはどのような思いを胸に
夏の夜を舞うのだろうか



8月16~18日

交通のご案内



●羽後町までの所要時間

北上市から(横手経由)車で2時間
盛岡市から(大曲経由)車で約3時間
仙台市から(湯沢経由)車で約3.5時間



秋田県羽後町観光物産協会

秋田県雄勝郡羽後町西馬音内字中野200

TEL 0183-55-8635

FAX 0183-55-8636

<http://ugo.main.jp>

●音頭の歌詞 — 一例 —

～時勢はどうでも、世間はなんでも 踊りこ踊たんせ
日本開闢、天の岩戸も 踊りで夜が明けた
～踊りの上手も 見目のよいのも 土地柄血すじ柄
なんでもかんでも 嫁コを欲しがら ここから貰たんせ
～踊るて跳ねるて 若いうちだよ おらよに年ゆけば
なんぼ上手に 踊てみせだて 誰もみる人ねえ
～おら家のお多福あ めったにない事 ぴんとて髪ゆつた
お寺さ行くどて そば屋さひかかつて みんなに笑われた
～豊作だ万作だ これあ又良い秋だ
面白まぎれに 一つ踊たば 娘腹万作だ
～西馬音内女こは どこさえたたて 目に立つはずだんす
手つき見てたんせ 足つき見てたんせ 腰つき見てたんせ
～名物踊りは 数ある中にも 西馬音内あ一番だ
嫁こも踊るし 姑も踊る 息子はなお踊る
～隣の娘さ 踊りこ教えだば ふんどし礼にもらた
さっそく持て来て 娘どさ見せだば横面なぐられた
～一杯気嫌で 踊りこ踊たば みんなにほめられた
いい気になりやがて 頬かむりとたれば 息子にどやされた

●がんけ(甚句)の歌詩 — 一例 —

～お盆恋しや かがり火恋し まして踊り子 なお恋し
～月は更けゆく 踊りは洩える 雲井はるかに 雁の声
～踊る姿にや 一目ではれた 彦三頭巾で 顔しらぬ
～今宵ひと夜は まけずに踊れ オジャレ篝火 消ゆるまで
～今宵ひと夜は 力のかがり 踊れ東の しらむまで
～踊れ踊れよ 夜が明けるまで ひびく太鼓に 月がさす
～がんけ踊って 知らねでいたば 夜明け鳥が 阿呆というた
～踊つてみたさに 盆踊り習った ヤツと覚えたば 盆がすぎた
～揃うた揃うたよ 踊り子揃うた 稲の出穂より なお揃うた
～踊り踊らば 三十が盛り 三十過ぎれば その子が踊る
～押せや押せ押せ 下関までも 押せば港が 近くなる
～お前百まで わしや九十九まで ともに白髪の 生えるまで

踊り継ぐ七百年の歴史

豊年祈願や盆供養のために始められたという伝統行事。亡者を思わせる彦三頭巾。編み笠を深くかぶり、美しい端縫い衣裳を身にまとい、女たちが優雅に夏の夜を舞う…それとは対照的に、にぎやかに鳴り響く囃子の音が幻想的な世界を映しだしている。



囃子について

西馬音内盆踊りのお囃子には「よせ太鼓」「音頭」「とり音頭」「がんげ」の四種類があります。

楽器の編成は、笛、大太鼓、小太鼓、三味線、鼓、鉦などで、演奏者（囃子方）は大小の太鼓、鼓、鉦は各一人ずつ、笛、三味線は複



ひこき頭巾

踊りの中の黒い覆面「ひこき頭巾」は、亡者を連想させ、幻想的な感じを与えます。

秋田県由利地方の「はなふくべ」や山形庄内地方の「はんこたんな」と関連があるとか、歌舞伎の黒子からヒントを得たとかの諸説があります。はつきりした由来は分かっています。



いずれ、亡者踊りといわれた雰囲気をかもし出しています。

数で奏されます。鳴物6種の他、地口または甚句の唄い手が加わり、世間世事を風刺したものの・野趣抒情溢れるもの・楽天的な中にも農民特有の素朴なエロティシズムを匂わせたもの等、多彩な歌詩で踊りを盛り上げます。

囃子方は、会場のほぼ中央の踊りの輪の外にかけられた特設檯で、左右の柱には「五穀豊穰」「豊年万作」と書いた角の長灯籠、腰には幔幕を張って、ひなびた中にも華やかな情緒をただよわせ、夜半まで奏されま

端縫い衣裳

西馬音内盆踊り特有の美しい踊り衣裳で、女性の踊り手が多く用いるのが「端縫い衣裳」です。（この場合、頭巾よりも編み笠を用います。）

端縫い衣裳は四種も五種もの絹布を端縫ったもので、帯もしぶ味好みのものが多く、結び方は、御殿女中風な形になります。

多数の見物人の目にふれる踊り衣裳に、婦人たちが強い関心と工夫をよせ、図柄と配色に苦心した様子が偲べれます。小布や半端な

布でも捨てず、思い思いの衣裳を作りあげていったことでしょう。また、祖母から母へ、そしてその子供へと受け継がれたものがあるとするれば、それを身に付けて踊り、故郷に生きる女たちの追憶にふけるという夢もあつたことでしょう。

踊りについて

にぎやかで、勇ましく野性的な囃子に対し、優雅で流れるような上方風の美しい踊りの対照が西馬音内盆踊りの特長です。

踊りには、音頭とがんげがあり、がんげは、月光の夜を飛ぶ雁の姿を踊りから連想した「雁形」、仏教伝来の「勸化」、現世の悲運を悼み、来世の幸運を願う「願生化生の踊り」がまつて「願化踊り」と呼ばれたとの諸説があります。がんげの歌詞、節回しには哀調が漂い、本来、娯楽の踊りでなかったことを物語るのではないのでしょうか。



踊りの起源

西馬音内盆踊りの起源、沿革については記録されたものが全くないため、まこと言い伝えによるもの

正応年間（一二八八〜九三）に源親という修行僧が、蔵王権現（現在の西馬音内御霊神社）を勧請し、この境内で豊年祈願として踊らせたものという説があります。これが、慶長六年（一六〇一）西馬音内城主小野寺茂道一族が滅び、土着の遺臣たちが主君を仁旧盆の一日（二〇日）までの五日間、宝泉寺（西馬音内寺町）境内で行なわれた亡者踊りと合流しました。そして天明年間（一七八一〜一七八九）に現在の本町通りに移り、現在まで継承されてきたものと伝えられています。

伝統を守る

大正年間に、いよいよ盛んになった盆踊りに対して、警察当局が「風俗を乱すもの」として弾圧したことが伝えられています。町の人々の抗議も押し問答の繰り返しでしたがあかず、その上、そうした事情で必要な経費も集めることができず、一時は非常に衰えました。しかし、西馬音内盆踊りの復興を強く望む住民感情が高まり、地主の中にも私財を投げ出してまで復興を望む人々があつたので、数年後には、元のようになりなりました。

現在、西馬音内盆踊りを普及・伝承するため、「西馬音内盆踊り保存会」が毎月第3土曜日に踊りの練習会を行なっており、また、定期公演会も毎月第2土曜日に開催しております。

